



## 校長室だより

自立に向かって「自分から」

学校と家庭・地域を結ぶ架け橋通信

第11号 令和4年10月7日

小美玉市立美野里中学校

### 「新人戦」から子供たちが学んでいること

美野里中学校は新人戦で、東茨城地区大会参加部活動全てが、中央地区進出という快挙を成し遂げました。この快挙は、3年生の姿を見た1・2年生が奮い立った結果、つまり学校全体で成し遂げた快挙といってよいと思います。

もちろん結果が全てではありませんが、良い結果が出たときには、皆で喜び合うこともごく自然なことであり、美しいことだと思います。試合会場で、選手たちのひたむきな姿勢を目の当たりにすると、勝つためなら手段を選ばないという勝利至上主義とはかけ離れた、教育の場であることをつくづくと感ずることができます。

だからこそ、良い結果が出たときには、周りも「広い心」で素直に喜び合いたいものだと思います。

今回は運動部活動を軸にした話にしますが、スポーツの世界は、勝ち負けの結果が明らかになります。勝つ喜びを味わうことも多々ありますが、子供たちは、ときに勝負の厳しさを味わうこととなります。実際、私もいろいろな試合会場に足を運びましたが、「あと1点、あと1アウトとれたならば」といった試合もいくつもありました。それによって敗れたとき、子供たちは涙が出るほど悔しい思いを味わったと思います。でも、誰のせいにもしてはいけません。それがスポーツマンシップです。負けは負けとして受け入れて次につなげていくのです。

私は、以前校長室だより（R3 第10号）で、レジリエンス（resilience）について紹介させていただきました。レジリエンスとは、「跳ね返り、弾力、回復力、復元力」という意味の言葉です。

これから先、子供たちには心から幸せになってほしいと思いますが、そうはいつでも順風満帆な日ばかり続くはずがありません。何かしらつらい思いをする日があるはずで、そんなとき、起こってしまったことにいつまでも執着し続けて、歩みを止めてしまうのではなく、「立ち直っていく」勉強をスポーツを通してしているのです。

いきがっている人が強い人なのではなく、困難に直面しても立ち直って次の一歩を歩み出せる人が強い人なのだと私は思います。

パラリンピックが終わってしまうと、パラスポーツの選手の話も遠のいてしまいましたが、多くの困難や心的なダメージから立ち直って、競技に向かい合うパラアスリートは、そういう意味で、我々のお手本かもしれません。

私は、人間の心に強い興味関心があります。とりわけ、ひたむきに困難に立ち向かう人にリスペクトを感じます。自分の生き方の指針にもしたいと思っています。

新人戦は、まだまだ道の途中です。中央地区で敗れ、悔しい思いをした部活動もあるでしょう。でも、悔しいと思えることが大切なことです。より高い目標を見据えている証拠でもあり、向上心の種があるからです。この大会で得た思いを総体までつなげて、日々精進していくことが何よりも大切です。さらに心・技・体を「自分から」磨いていってください。伸びしろだらけの子供たちが、この大会の結果をどう考え、次にどう実践していくのか楽しみです。

美野里中生は、励まし合いながら、自分も仲間も伸びていく資質を大いにもっていると思います。心から、今後の成長を応援したいと思います。

